

クオリア

看護部通信

～その人のための大切な時間～

第3号

平成30年8月発行
さいたま市立病院看護部
リクルート委員会



救急外来 副看護師長：布施恵美
救急外来看護師の新たな役割を考える
～地域と連携した関わりを通して～



さいたま市立病院は、さいたま市内の二次救急医療を担い、地域の基幹病院としての役割を果たしています。平成29年度の救急車の受け入れは6,520台、受診患者は延べ19,220人でした。

患者さんは、突発的な外傷や、急性疾患、慢性疾患の急性増悪などで、身体的苦痛や生命の危機を感じています。また、患者さんだけでなく近くで状況を見ているご家族も、同じ様に恐怖や不安を感じています。その為、丁寧な接遇や説明を心掛け、患者さんやご家族の気持ちに配慮しながら迅速に対応できるよう努めています。また、高齢者は疾患以外にも様々な問題を抱えていることが多くあり、精神的、社会的問題への介入も重要であると考えています。

75歳男性のAさんはスーパーで買い物中に、2～3分の意識消失があり救急搬送されました。救急隊接触時はJCS I-1でしたが、経過とともに意識清明となりました。自宅でも数回意識消失し転倒歴がある事、血液検査で貧血を認めたため入院が必要な状態でしたが、患者さんは入院を嫌がり自宅へ帰ることになりました。しかし、患者さんは一人暮らしで頼れる方もいない状況でした。そこで、退院調整室の看護師や区役所の担当者と連携し、介護保険の申請、ホームヘルパーの派遣等を行い、通院や日常生活が安全に過ごせるよう調整することができました。そして、現在は症状も安定し開業医と連携を取りながら経過観察を行っています。

救急搬送時はその患者さんの生活背景がよく見えます。また、同居する家族がいても介護力不足や高齢者世帯等で在宅の療養生活が難しく、救急外来の受診を繰り返し、入院を強く希望するケースもあります。こうしたケースに救急外来看護師として関わる中で、患者さんの身体的な問題だけではなく、生活上の問題や社会的問題に繋がる情報を見逃さない観察力が必要であると考えました。また問題に対して、院内の多種職や退院調整部門と協働し、地域の医療・介護スタッフと連携しながら、安心して治療が受けられ、安全な生活が継続できるよう患者さんやご家族を支援して行くことも重要であると考えます。

生活上の問題や社会的問題に繋がる情報を見逃さない観察力は、日々の業務の中で培われていくものだと思います。そのため、スタッフとケアを行いながら一緒にその患者さんの問題点を導き出し、解決策を考え、どの部門と連携を図ればよいか伝えるようにしています。そうすることで観察力だけでなく、洞察力も鍛えられ患者さんに合わせたケアができると思います。今後も救急外来看護師として観察力や洞察力を培い、院内・外の多職種と連携しながら、患者さんやご家族が安心できるようなかかわりができるよう、チーム一丸となって取り組んでいきたいと思ひます。

